

『最後の授業と授業参観』 押上武文

「戦後五十年教育の変遷」 子どもたちとのふれ合い 小学校退職校長たちの回顧 (文芸社) より

校長最後の卒業式を終えた翌日、平成7年3月26日、新規採用時の気分フィードバックして、“押上先生の最後の授業と授業参観”と銘打った催しに出かけた。

事の次第は、私が教員になって初めて担任をした昭和33年から35年までの、2・3・4年3組の子供たちで、もっとも今や40歳半ばを過ぎており、保護者の皆さんは70をとうに数えている人達が、私の退職に際して「私達の押上先生が再び私たちの押上先生として戻ってこられることを一同大変喜ばしく思います。そこで、4年3組一同と父母有志が集まり企画しました」というのである。私は教師冥利につける喜びと感謝をこめて参加した。

劈頭司会者が「授業を只今から始めますが、先生、例のように出席をおとりください」と言うのである。思えば、朝必ず一人ひとりの名前を呼び、なにかその都度コメントを付け、どの子にも呼びかけることを旨としていた。ところが、手元には名簿がない。出席者の机にはちゃんと置かれている。さては置き忘れか、あるいは連中の謀り事か。とにかく当時すしづめ教室と言われ、狭い机の間を蟹のように動かなければならない状況で、4年3組も55名で、都で最も多い児童数にふくらんだ。

子供が多いので、それがゆえに人ひとりを見のがしてはならない、大切に第一はすべての子供の名前を呼ぶことにあった。子供を元気にし勢いづける根源とも考えていた。

私は“勸進帖”ならず出席簿なしで「阿部博広-転出再転入、父親が大病なされた。浦野範男-無口ですばしっこく、働き者、榎本好太郎-お母様PTAの仕事で事故死、あばれ者の悪太郎が好太郎になる…」というように五十五名について、三十五年ぶりに点呼を終えることができた。期せずして、八人の保護者の方をふくめ驚きのような喜びのような拍手が起きた。私はかなり自信があったとはいえほっとし、今は亡き先輩たちの厳しい指導のおかげと感謝の念を禁じ得なかった。

大規模校であるうえ子供が増える途上にあったので、教師層はベテラン、若手いわば多種多様で、マイカーのない時代ゆえ遅くまで仕事をし討議をし、コーヒー店で語り、居酒屋で議論を重ねるのであった。内容の多くは終始喜貝、教育委員会から依頼された“子供がやる気を起す教育”の具体的な実践にかかわる問いつめであった。教育課程及び学校でのすべての活動並びに学校外の活動も含めて研究視野においていたので、各教科の指導だけでなく、当時京王線や西武線を利用して登下校する子供が多いので、その生活・安全指導、地域ごとの夜の懇談会の在り方などについても、誰となく提案し、誰となく重ねて提言し話し合えば、新たな課題が生まれ、尽きぬ話題が継続された。その議論の中核には常に子供が存在し、どの子も元気が出て生き生きした生活を創り出そうという実践に学んだのである。

(中略) 司会者は、第三ステップとして、この会合のために創った、いわば復刻版に新たに文章を加えた“でっかい水の輪”を渡してくれた。この文集をテキストにして今日は授業を展開しようという魂胆である。これは私には大きな感激であった。当時教師たちは、子供の自発性(やる気)を文字言語に置き換えて、ことばと行動の一致を図ろうと考えていた「鉛筆で考える」ことを合言葉に毎日ガリ版をきり、ガリ版先生集団であった。私は55名をもじってGO!GO!をイメージし、やる気の足音を高くするため“あしおと”という文集をつくった。やがて、子供のよさをひろげていくよう“でっかい水の輪”文集作成をすすめた。「子供の文化は子供自ら創造し、味わっていくもの」「水の輪」に望んでいることは、やがて子供の手で作られることと、創刊号に書いてあるから、教え子によって創られ手渡されたのはうれしさ百倍であった。次のような作文が掲載されている。

「先生をがっかりさせてすみません。ぼくは朝早く来たのに回転窓を開けなかった。いつも早く来たら回転窓をあけるのに…」(田上)「僕はきょう日直だ。先生が入ってきた。僕は回転窓を開けるのをわすれていた。先生は黒板に先生の気持を書いた。そして、僕たちに「返事を書いてください」といった。日直は僕たちだ。回転窓を開けるのは僕たちの役目だ。先生もはりきって入ってきて、きつとうんと勉強しようと思っていたのに……。次の日直はしっかりやりたい……」(玉田)

私は、文字言語で自分の考えを表現させ、そのことに関して話し合い文字表現を通して内省し認識するように考えていた。この復刻文集を編集した坂齋一良は「4年3組は何か問題が起きると、全員でそのことについて話し合い、自分達で決めた結論に全員が納得した。先生が決めるのではなく、自分達の問題を自分達で決めるようにしむけてくれた。『ひとりはみんなのために、みんなはひとりのために』この言葉は私の心にずっと刻まれている」と書いている。彼は演出家スタニスラフスキーの言葉を人生の糧としている。私に出来たことは自分のよさ、友だちのよさを生かし合いながら、竹内美代子が指摘するように「よく遊び、少し勉強して、ほんとうによく遊びました。そして、みんな元気で楽しい時間の積み重ねでした。あの頃が私の原点です」に尽きるようである。